

のうみんげいじゅつ がいろんこうよう

農民芸術概論綱要

宮澤賢治 MIYAZAWA KENJI

宮澤賢治先生ご生誕130年記念(1896年8月27日生)

宮澤賢治先生 埼玉県来県110周年記念(1916年9月)

農民芸術概論綱要発表100周年記念(1926年4月発表)



1. 序論

……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……

おれたちはみな農民である ずいぶん忙がしく仕事もつらい

もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはそういう人も応々あった

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教えた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である



宮澤賢治先生ご生誕130周年・農民芸術概論綱要発表100周年記念

2. 農民芸術の興隆

なせ げいじゅつ おこ
……何故われらの芸術がいま起らねばならないか……

か しふ とぼ かなり たの い
曾つてわれらの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きていた

げいじゅつ しゅうきょう
そこには芸術も宗教もあった

ろうどう せいぞん
いまわれらにはただ労働が 生存があるばかりである

しゅうきょう つか きんだいかがく ちかん しか かがく つめた くら
宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は 冷く暗い

げいじゅつ はな しか だらく
芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した

しゅうきょうか げいじゅつか しんぜん もし び どくせん う
いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである

あがな ちから また ひつよう
われらに購うべき力もなく 又さるものを必要とせぬ

あら ただ みち い び つく
いまやわれらは新たに正しき道を行き われらの美をば創らねばならぬ

げいじゅつ はいいろ ろうどう もや
芸術をもてあの灰色の労働を燃せ

ふだん いさぎよ たの そうぞう
ここにはわれら不断の 潔く楽しい創造がある

みやこびと きた まじわ せかい たい い
都人よ 来つてわれらに交れ 世界よ 他意なきわれらを容れよ



3. 農民芸術の本質

なに げいじゅつ しんぞう
……何がわれらの芸術の心臓をなすものであるか……

のうみんげいじゅつ び ほんしつ
もとより農民芸術も美を本質とするであろう

あら び つく びがく た いどう
われらは新たな美を創る 美学は絶えず移動する

び ご めつ はて ひろ
「美」の語さえ滅するまでに それは果なく拡がるであろう

きろ じゃろ いまし
岐路と邪路とをわれらは警めねばならぬ

のうみんげいじゅつ うちゅうかんじょう ち じん こせい つう ぐたいてき ひょうげん
農民芸術とは宇宙感情の 地 人 個性と通ずる具体的なる表現である

ちよっかん じょうちよ ないけいけん そざい むいしき あるい うい そうぞう
そは直観と情緒との内経験を素材としたる無意識或は有意の創造である

つね じっせいかつ こうてい いっそう しんか たか
そは常に実生活を肯定しこれを一層深化し高くせんとする

じんせい しぜん ふだん げいじゅつしゃしん つ しいか
そは人生と自然とを不断の芸術写真とし尽くことなき詩歌とし

きょだい えんげきぶよう かんしょうきょうじゅ おし
巨大な演劇舞踊として観照享受することを教える

ひとびと せいしん こうつう
そは人々の精神を交通せしめ

かんじょう しゃかいか つい いっさい くきょうち みちび
その感情を社会化し遂に一切を究竟地にまで導かんとする

げいじゅつ しんこうぶんか きそ
かくてわれらの芸術は新興文化の基礎である



4. 農民芸術 の分野

ぐあい ぶんるい え
……どんな工合にそれが分類され得るか……

こえ きよくちよう せつそう せいがかく おと しか きがく
声に曲調節奏あれば声楽をなし 音が然れば器楽をなす

ご ひようげん さんぶん せつそう しか
語まことの表現あれば散文をなし 節奏あれば詩歌となる

こうどう ひようじよう えんげき せつそう ぶよう
行動まことの表情あれば演劇をなし 節奏あれば舞踊となる

こうしょうしゃき ひようげん せい どう げいじゅつしゃしん
光象写機に表現すれば静と動との 芸術写真をつくる

こうしょうてがき じよう かいが つく そざい ちょうこく
光象手描を成ずれば絵画を作り 塑材によれば彫刻となる

ふくごう げき かけき ゆうせいかつどうしゃしん
複合により劇と歌劇と 有声活動写真をつくる

じゆんし おお こうみ しょく ともな
準志は多く香味と触を伴えり

せいごじゆんし もとず えんぜつ ろんぶん きょうせつ
声語準志に基けば 演説 論文 教説をなす

こうしょうせいかつ じゆんし けんちくおよび いふく
光象生活準志によりて 建築及衣服をなす

こうしょう かくい じゆんし しょた こうげいびじゅつ
光象各異の準志によりて 諸多の工芸美術をつくる

こうしょう せいさん じゆんし がっ えんげいえいりん とちせつけい う
光象生産準志に合し 園芸営林土地設計を産む

こうみ こうしょく せいかつじゆんし ひようげん りょうり せいさん しょう
香味光触生活準志に表現あれば 料理と生産とを生ず

こうどう じゆんし けつごう ろうどうきょうぎたいそう
行動準志と結合すれば 労働競技体操となる



5. 農民芸術の（諸）主義

しゅちよう かのう
……それらのなかにどんな主張が可能であるか……

げいじゅつ げいじゅつ しょうねんき あら せいねんきご せんざい
芸術のための芸術は少年期に現われ青年期後に潜在する

じんせい げいじゅつ せいねんき せいねんいご せんざい
人生のための芸術は青年期にあり 成年以後に潜在する

げいじゅつ じんせい ろうねんきちゆう かんせい
芸術としての人生は老年期中に完成する

せんい ふか こせい かんけい
その遷移にはその深さと個性が関係する

こせい かん へいぞん
リアリズムとロマンティシズムは個性に関して併存する

けいしきしゅぎ せいたい ひょうだいしゅぎ ぞくかんど
形式主義は正態により標題主義は続感度による

よんじかんかく せいげいじゅつ りゅうどう いれ
四次感覚は静芸術に流動を容る

しんぴしゅぎ た あら おこ
神秘主義は絶えず新たに起るであろう

ひょうげんほう しゅちよう こせい かぎ かのう
表現法のいかなる主張も個性の限り可能である



6. 農民芸術の製作

ちやくしゆ すす い
……いかに着手しいかに進んで行ったらいいか……

せかい たい だい きがん おこ
世界に対する大なる希願をまず起せ

つよ ただ せいかつ くなん さ ちやくしん
強く正しく生活せよ 苦難を避けて直進せよ

かんじゆ のち もほりそうか つめた すると かいせき ねつ ちから そうごう
感受の後に模倣理想化 冷く鋭き解析と熱あり力ある総合と

しよさく むいしきちゆう せんにゆう びてき ふかさ そうぞうよく
諸作無意識中に潜入するほど美的の深と創造力はかわる

き こうかい はいたい せいさくしんしよな
機により興会し胚胎すれば製作心象中にあり

れんい しま ひょうげん じょうあん な かんせい
練意了って表現し 定案成れば完成せらる

むいしき そく あふ おお むりよく さぎ
無意識即から溢れるものでなければ多く無力か詐偽である

かみ なが の くきよ ま かお み
髪を長くしコーヒーを呑み空虚に待てる顔つきを見よ

なや も ころ ころ
なべての悩みをたきぎと燃やし なべての心を心とせよ

かせ くも
風とゆきさし 雲からエネルギーをとれ



7. 農民芸術の産者

げいじゅつか いみ
……われらのなかで芸術家とはどういうことを意味するか……

しよくぎょうげいじゅつか いちど ほろ
職業芸術家は一度亡びねばならぬ

たればと げいじゅつか かんじゅ
誰人もみな芸術家たる感受をなせ

こせい すぐ ほうめん おい おのおの や ひょうげん
個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ

しか げいじゅつか
然もめいめいそのときどきの芸術家である

そうさく みずか わ おこ や こうい おの しゅうちゅう
創作自ら湧き起り止むなきときは行為は自づと集中される

おそ ひとびと せいかつ ほしよ
そのとき恐らく人々はその生活を保証するだろう

そうさく や かれ つち た
創作止めば彼はふたたび土に起つ

おお かいほう てんさい
ここには多くの解放された天才がある

こせい ことな いくおく てんさい なら た かく じめん てん
個性の異なる幾億の天才も並び立つべく斯て地面も天となる



8. 農民芸術の批評

ただ ひょうか かんしょう
……正しい評価や鑑賞はまずいかにしてなされるか……

ひひょう どうぜん しゃかいいしき いじょう おい
批評は当然社会意識以上に於てなさねばならぬ

あや ひひょう みずか ないげいじゅつ た がいげいじゅつ りつ よ
誤まれる批評は自らの内芸術で他の外芸術を律するに因る

さんしゃ ふだん ないてきひひょう も
産者は不断に内的批評を有たねばならぬ

ひひょう たちば はかいてき そうぞうてき およびかんしょうてき みつつ
批評の立場に破壊的創造的及観照的の三がある

はかいてきひひょう さんしゃ ふる た
破壊的批評は産者を奮い起たしめる

そうぞうてきひひょう さんしゃ あんじ しどう
創造的批評は産者を暗示し指導する

そうぞうてきひひょうか さんしゃ ひと しかく い
創造的批評家には産者に均しい資格が要る

かんしょうてきひひょう かんせい げいじゅつ たい おこな
観照的批評は完成された芸術に対して行われる

ひひょう たい さんしゃ おな しゃかいいしき いじょう もつ こた
批評に対する産者は同じく社会意識以上を以て応えねばならぬ

かく しょう そうろん あらた けんせつ いた
斯ても生ずる争論ならばそは新なる建設に至る



10. 結 論

い ぎんが つつ どうめい いし おお ちから ねつ
……われらに要るものは銀河を包む透明な意志 大きな力と熱である……

ぜんと かがや けんしゅん
われらの前途は輝きながら峻峻である

けんしゅん たび よんじげいじゅつ きょだい ふか くわ
峻峻のその度ごとに四次芸術は巨大と深さとを加える

しじん くつう きょうらく
詩人は苦痛をも享樂する

えいきゅう みかんせい かんせい
永久の未完成これ完成である

りかい しま かか ろん す
理解を了せばわれらは斯る論をも棄つる

ひつきょう みやざわ けんじ ねん かんがえ
畢竟ここには宮澤賢治1926年のその考があるのみである



宮澤賢治先生ご生誕130年

宮澤賢治先生は1896年(明治29年)8月27日、稗貫郡花巻川口町(現花巻市豊沢町)にて質・古着商を営む宮澤政次郎とイチの長男として生まれました。

詩人、童話作家、教師、科学者、宗教家など多彩な顔を持つ「マルチ人間」として大活躍し、1926年(大正15年)には農民の生活向上を目指して農業指導を実践するために羅須地人協会を設立。多方面で活動を行いますが、無理がたたりに病に倒れ、1933年(昭和8年)9月21日、『国訳妙法蓮華経』の頒布を遺言して37歳で永眠、銀河鉄道の乗客となりました。

宮澤賢治先生 埼玉来県110周年

宮澤賢治先生は「農民芸術概論綱要」発表10年前の1916年(大正5年)9月に、盛岡高等農林学校の地質調査旅行で埼玉県に来県し、秩父地方や熊谷市を訪問しています。時に20歳初秋晴天の秩父路。

埼玉県を愛し埼玉を謳った宮澤賢治先生。熊谷市の八木橋百貨店には宮澤賢治先生の歌碑が輝いて建っています。

農民芸術概論綱要発表100周年

「農民芸術概論綱要」は、1926年(大正15年)に宮澤賢治先生が、花巻農学校を3月に退職したあと、より実践的な農業と芸術教育の学び舎として同年4月に社会貢献活動として岩手県花巻市に開設した私塾「羅須地人協会(らすちじんきょうかい)」の「建学の精神」です。ここでの「農民」を「市民」に置き換えて、現代に生きる私

たちが実践する指針ともなります。



さいたま市 宮澤賢治協会

宮澤賢治先生ご生誕130周年・農民芸術概論綱要発表100周年記念

序 論

……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……

おれたちはみな農民である ずいぶん忙がしく仕事もつらい
もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい
われらの古い師父たちの中にはそういう人も応々あった
近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
この方向は古い聖者の踏みまた教えた道ではないか
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに依じて行くことである
われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である

農民芸術の興隆

……何故われらの芸術がいま起らねばならないか……

曾つてわれらの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きていた
そこには芸術も宗教もあった
いまわれらにはただ労働が生存があるばかりである
宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い
芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した
いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである
われらに購うべき力もなく 又さるものを必要とせぬ
いまやわれらは新たに正しき道を行き われらの美をば創らねばならぬ
芸術をもてあの灰色の労働を燃せ
ここにはわれら不断の 潔く楽しい創造がある
都人よ 来てわれらに交れ 世界よ 他意なきわれらを容れよ

農民芸術の本質

……何がわれらの芸術の心臓をなすものであるか……

もとより農民芸術も美を本質とするであろう
われらは新たな美を創る 美学は絶えず移動する
「美」の語さえ滅するまでに それは果なく拡がるであろう